様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　７日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520069
研究課題名（和文）
モダニティとニュートン主義：創造／反復、エクスタシス／現前性、自己中心化
研究課題名（英文）
Modernity and Newtonianism:instauratio, extasis/representation, Egocentrism
研究代表者：
長尾　伸一（Nagao Shinichi）
名古屋大学・経済学研究科・教授
研究者番号：30207980

研究成果の概要（和文）：
18 世紀のブリテン思想史を主な対象として、ニュートン主義と近代の科学主義が「近代」という観念の発見において果たした役割を、創造／反復、エクスタシス／現前性、自己中心化という 3 点にわたって解明した。

研究成果の概要（英文）：
Focusing mainly on the 18th century British thought, the project has explained the role of Newtonianism and scientism in the discovery of the concept of “modernity” according to the following three points; instauratio, extasis/representation, egocentrism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・社会思想史
キーワード：イギリス思想史、科学史、ニュートン主義、モダニティ

１．研究開始当初の背景

ニュートン主義は真空中を動く粒子の表象と機械論によって、啓蒙の基礎となる合理化された科学的世界像を提供し、それによって近代的人間観を生み出したと考えられてきたが、その自然科学以外の知の領域での展開は、ニュートン主義による世界の数学化、内在化、合理化、経験化などを指摘した、M.ホルクハイマー、T.W.アドルノの『啓蒙の弁証法』、E.カッシーラーの『啓蒙の哲学』、P・ゲイの『自由の科学』などの射程に基づいていた。だが 1970 年代以後、M.C.ジェイコブや S.シェイピンらエディンバラ学派などによって科学革命の見直しが進み、それまでの近代像とは異なった科学と宗教や政治の結合が指摘されてきた。また国際 18 世紀学会などで進む啓蒙研究の精緻化は、非西欧世界を含め、啓蒙の全体像をより多様性に富んだ形で示しつつある。申請者は社会科学生誕の地の一つである 18 世紀スコットランドを中心にイギリス・ニュートン主義を研究し、『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』、『トマス・リード』などで、自然と道徳世界を包括する観念複合体としてニュートン主義を描いた。これらの研究の到達点を踏まえ、古典的な啓蒙研究とは異なったニュートン主義の全体像を描写し、それがどのようにしてア

ドルノ達の目に映った 20 世紀初頭の近代イデオロギーに変貌したかを示すことで、従来の理解とは異なった形で思想・文化運動としてのモダニティを提示することが次の課題となっていた。

２．研究の目的

本研究は近代思想の形成におけるニュートン主義の役割を再評価することでモダニティに内在する葛藤と多様性を解明し、現代の支配的なイデオロギーの原型であるステレオ・タイプの「近代」の起源と、それに包摂されえない未発の思想的可能性の両者を指摘することをめざす。そのために大陸ニュートン主義と区別されるブリテン・ニュートン主義の 18 世紀における展開と、19 世紀における変容を中心に分析し、それと大陸ニュートン主義や同時代東アジアのニュートン主義を比較しながら、創造/反復、エクスタシス/現前性、自己中心化の 3 点に集約して、相互に矛盾し合う契機の輻輳的な運動という形で文化としてのモダニティをとらえることを目的とした。

具体的な方法としては、刊本、マニュスクリプトの研究に加えて電子文献データ・ベースの活用を図り、18、19 世紀の自然と社会にかかわる言説空間の再構成を行った。

３．研究の方法

本研究は啓蒙期のニュートン主義の実像と、19 世紀におけるその変容の解明を通じて、内的葛藤を孕んだモダニティの特徴を以下の 3 点に集約して示す。

1) Instauratio(創造/反復)
フランシス･ベーコンの主著 Instauratio Magna が「大革新」と訳されてきたように、17 世紀の科学革命からニュートン主義への流れは知識の根本的な転換を意図する企てと見られてきた。しかしそこには古代科学の復興という意図も働いている。この二面は、既成性に頽落した文明を立て直そうとする、文明の自己修復作用の一種であるモダニティの重要な側面を指示している。その点でモダニティは単純な進歩主義ではなく、根底的な革新を企てると同時に、つねに原点回帰を反復するウルトラ保守主義でもある。本研究はこの点を、ベーコン、デカルトに触れつつ、ニュートン主義に見られる古代の復興と新しい科学の成立の関係について、数学と自然学における analysis 概念と「ニュートンの方法」の諸分野での展開を通じて明らかにする。

2) Extasis/representation(エクスタシス/現前性)
古代の「世界の複数性」論は、近代天文学の成果によって復活し、18 世紀にはニュートン主義の自然像と一体視された。この観念によれば、つねに人間知性に不可視な未知の領域を存在し、人間は「知らない世界」を想定しながら生きることを余儀なくされる。この古代の存在論的な相対主義の視点が、地理的発見による異文化との遭遇とともに、啓蒙の批判精神の背後にある自己からの脱出衝動を根拠付け、知性の相対化の運動を支えたと考えられる。しかしこの脱出衝動は逆に、自己への回帰を喚起する。それは自己と世界を自己に現前するものとして把握しようとし、科学革命期には、デカルトの世界体系に見られるような、直観的明証性と論理的整合性のみによった全一的な世界像を生み出した。重力や無限虚空間など非直観的な概念に立つニュートン体系もこの衝動に導かれ、19 世紀には無限の等質的空間内を運動する粒子という、機械論的世界把握へと洗練されていった。この二つの矛盾する衝動が、モダニティに内在するダイナミズムを生み出している。本研究ではこれらの点を、ニュートン主義による「空間」の拡大と統合の問題と見て、天文学と博物学の比較、複数性論争の展開と変容の検討、世界表象の展開を通じて描きだす。

3) Egocentrism(自己中心化)
だがヨーロッパが世界支配を達成した 19 世紀後半には以上のような葛藤は消失していき、やがてステレオ・タイプの近代思想史が描いてきた「近代的世界像」が生まれた。そこにはホッブズを除く初期近代の思想家たちが依然として立脚してきた古代的な、宇宙の原理としての理性から、個人の意思決定のみにかかわる計算能力への理性の変貌、収縮が見られる。18 世紀末の幾何学的無限空間の成立によってニュートン主義は直観的に明証的な世界の比喩を提供したが、それがこの理性の自己中心化と結びついたとき、世界喩としてのニュートン主義が完成した。それは「近代科学」が明らかにした世界の表象にしたがって人間世界のあり方を構想することを可能にし、古代世界の古代宇宙論と道徳世界の共犯関係に代替することになった。その社会的背景には、19 世紀に科学が統治の知としての正統性を獲得し、制度として国家的ガヴァナンスに組み込まれていったことがある。20 世紀初頭の相対論や量子論によって世界喩としてのニュートン主義は解体したが、

新しい物理学は代替する直観的な世界表象を生み出すことができず、物理的世界における世界喩は消滅した。こうしてA.ギデンズが『近代とはいかなる時代か?』で描いたニュートン主義の秩序の表象を継承した社会的知の支配と、その裏面である宇宙の喪失という現代世界のイデオロギーが誕生した。本研究ではこの過程を、初期近代の理性概念の多様性と矛盾の解明、イギリスと大陸のニュートン主義および儒教文化圏の東アジアとの比較対照によるニュートン主義の世界喩の成立とその性格の分析、ニュートン主義の定式化と衰退にかかわる進化論と相対論のインパクトの検討、19世紀後半から20世紀前半の経済学における選択理論の成立におけるニュートン主義の介入の分析を通じて行う。

本研究は学際的思想史であり、主に科学史を社会思想史と結びつけることによって、近代的知性の自己葛藤的な姿を描き出すことを目指した。また本研究は資料操作面でも特長を持っている。本研究では申請者が従来行ってきた手稿、講義ノートなどのマニュスクリプト研究による非公式の言説の復元作業とともに、近年利用可能となったECCO、EEBOなどの膨大な文献資料の全文検索を可能にする電子文献データ・ベースによる研究手法を開発した。それらは刊本の世界の網羅的調査によって、広大な言説空間の構造を研究することを可能にした。この言説空間の再構成という思想史の方法を実行する点でも、本研究は新しい試みとなった。

４．研究成果

本研究は思想史学でのウィッグ史観批判を継承しながら、近代思想像の分散、解体にとどまりがちなポスト・モダニズム的な視野を越え、総合的なモダニティ像を提供する試みである。そのため代表者が行ってきたニュートン主義の再構成を媒介として、ニュートン主義の近代思想史上の意義をカッシーラーやゲイの古典的研究とはまったく異なる視角から確定し、文化としての「モダニティ」概念を、整合的なモノリシックな統一体ではなく、葛藤をはらんだ運動体として素描し、近代思想研究に一つの方向を示唆することを目指す。それによって「ポスト・モダニズム以後」のモダニティ研究に新しい視野を提供し、「啓蒙」、「近代」、「人権」などの観念を解体して現代科学の生命、宇宙像にふさわしく改作するための手がかりを与えることが期待された。

本研究ではとくに英語圏のニュートン主義に焦点をあてて、以下の諸点の解明に絞って研究を進めた。

（１）ニュートン主義に見られる古代の復興と新しい科学の成立の関係
（２）ニュートン主義における「空間」の拡大
（３）初期近代の理性概念の多様性と矛盾
（４）　ニュートン主義の世界喩の成立とその性格
（５）18 世紀、19 世紀の複数性論争とその意味
（６）ニュートン主義の定式化と衰退
（７）ニュートン的世界喩の持続

その結果、18 世紀から 19 世紀にかけてのニュートン主義が、モダニティの形成に対して、単に科学方法論のみならず、思想の内実的な点にまでかかわっていたことが明らかにされた。また物理学、天文学から生物学に主役を交代した、科学を起源とするメタファーとしての世界像の根底においても、初期のニュートン主義の影響が残存していることも確認できた。このような点で、現在では相対論、量子論や今後の統一理論に席を譲ったとはいえ、ニュートン主義は現代世界においていまだに規定力を保っているということができる。

本研究の結果、このようなニュートン主義の生成、発展から人間の科学の形成を内在的に導くことが以後の研究の課題として明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①Shinichi Nagao, Scottish Newtonianism in Moral Sciences; Ferguson, Reid, Smith and Scottish Natural Scientists, "The Economic Science", Vol.54 No.2, pp.1-15、査読無、2010

Shinichi Nagao, Thomas Reid on the plurality of worlds: its Scottish contexts and beyond, "The Economic Science", Vol.54 No.3, pp.1-23、査読無、2010

〔学会発表〕（計８　件）

①長尾伸一、大会セッション世話人および司会、「各国、各時代比較による近代ヨーロッパ社会思想史記述の試み」、社会思想史学会第 35 回大会、神奈川大学、2010 年 10 月 24 日

②長尾伸一、大会セッション世話人および司

会、幹事会企画セッション「社会民主主義の再検討」、社会思想史学会第35回大会、神奈川大学、2010年10月23日

③Shinichi Nagao, Scottish Newtonianism in Moral Sciences; Ferguson, Reid, Smith and Scottish Natural Scientists, 2nd Princeton International Symposium on Scottish Philosophy & 18th Scottish Studies Society Annual Conference in association & the International Adam Smith Society, Princeton Theological Seminary, Princeton NJ, USA, 2010.6.25.

④ Shinichi Nagao, Thomas Reid on the plurality of worlds: its Scottish contexts and beyond, Thomas Reid From His Time To Ours: Annual Conference of the British Society for the History of Philosophy 2010, Glasgow University, UK, 2010.3.25.

⑤長尾伸一、共通論題「帝国」基調報告および司会、日本18世紀学会第31回大会、多摩美術大学、2009年6月21日

⑥長尾伸一、報告"Newtonianism and the Plurality of Worlds in the 18th century"および総合司会、国際研究集会「知の原理/方法」　東京大学、2009年6月19日

⑦長尾伸一、大会セッション「進化と選択の合理性」世話人および司会、進化経済学会第13回大会、岡山大学、2009年3月29日

⑧Shinichi Nagao, Scottish Intellectuals' Influences in 19th century Japan, CSSP Spring Workshop2009: Scottish Philosophy in America and Asia, Princeton Theological Seminary, Princeton NJ, USA, 2009.3,14

〔図書〕（計２　件）

①富永茂樹編『啓蒙の運命』、名古屋大学出版会、2011年3月（うち長尾伸一、「ニュートン主義と薔薇十字団員の月世界旅行」pp.104-137執筆）

②大野誠編『近代イギリスと公共圏』昭和堂、2009年6月（うち長尾伸一、「公的言説圏の複数性-18 世紀イギリスの哲学と数学の言説をめぐって」、pp.73-101執筆）

６．研究組織
(1)研究代表者
長尾　伸一（Nagao Shinichi）
名古屋大学・経済学研究科・教授
研究者番号：30207980

(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし